

松浦佐用後石魂録

後集卷之三

^ 13  
3240  
8



門へ13  
3240  
巻8

松浦佐用後石魂録後集卷之六

東都

曲亭主人編次

第二十回

舊怨を釋く善新怨を購ふ

登時根塚若二郎の瀬川吉次が物のふ感嘆しく脚を拍く音も  
くまの相肖さる。相貌身長語音も兄弟一毫も違ひぬ。雙  
児といふと稀なり。むろ唐山は張伯階といふものなり。そが弟を張仲階と  
いひぬ。兄弟よく相肖さると壁に影と鏡の如し。有此而あると仲階が妻  
某氏と唯妍化粧し。兄伯階がほろふた。けのりさか結髪化粧を  
いさよもいぬ。美しうてをゆるめ。とうち戯まき。伯階が身をさへん。と  
けのり伯階敬馬に誦す。あちさか弟の仲階を。思ひたへ。のりさか  
くも悟り。微笑する。是伯階なり。仲階あむさう。といふ。その妻

余本伊  
余本

石魂録後集卷之六

二十回

昭和十年  
七月九日

駭羞く怒地まの退る。姑くく又伯階が端近くおろすをりし我。  
彼妻亦遙かえく。あまの真のうが夫へとせむ身邊にまう。是裏の女  
術と舎兄を死身と認違へ。せしむるをいひはり死。と恥くくはせしと  
告る。伯階のく足まう。これの是伯階の午。何ゆるをのりあかさん。  
いと漫へと容も。彼妻吐嗟と故罵羞く。ゆびまの隠れ。をる便  
室ののをり。稍久く出さう。又白汲身のをな似り。櫛留の秋布の刀  
自と糸秋と送郎を争ひ。日を同うあき語るべし。益の辨。似  
まとも。女兒糸秋の戊の未の午己の午の月戊の未の日己の午の時  
生れ。のふ自然と七の八字の。生れ。日生れ。土は属するの。この  
日門人某甲が秋の早咲を贈り。あ。これ糸秋と名つけ。有比而後  
よ。秋の色。依る。伏倒れて。難。壁言。婦の。依り。

生涯を送る。似。ふ糸秋の瀬川浦二郎と縁と結び。ま  
婚姻を救む。生別れ。三稔の間。侯不樂。甲斐も。凶計を  
く。細く病。せんと。親の思。知る。面目。と。いひけく。  
頻り。嘆息。ふ。枕が憾。吉次。秋布。慰め。共  
侶。頭を垂。若二郎。貌を改。嗜。白鳥。許。瀬  
川氏の。候。関。暮七。の。小。死。居。の。話。こ。え  
進。と。客。漏。さ。能。中。暮七。の。心。と。先。秋布。の。對  
南。最。面。く。い。け。仇。敵。の。錯。誤。の。某。が。只。俗。語。を。信。と。め。く。も。出  
が。より。俊。平。と。え。喪。ひ。の。所。云。一。盲。衆。盲。を。引。死。一。犬。形。と。謬。吠。と。羣  
犬。無。形。を。吠。と。似。く。人。心。あ。れ。ど。も。御。教。書。の。と。り。復。し。て。の。と。參。り。表。不  
酒。樓。の。の。り。別。を。な。り。より。逸。止。歩。出。く。宮。嶋。吟。へ。走。の。の。り。

庄客們うち取巻ひく死骸と檢つ置々と衆皆評議區々當下某處  
○庄客們の三人の死骸と心を奪れく。彼御教書とより揚はよ  
暇さうらん不意は發て搔攫ん御教書の駕篋の裡面欲然とむを  
駕篋のほとのよあらんよ見定め取らんむと尋思ごう近づく程は月  
いよく隈るて塵芥も分つは足れどわく件の吟路へたのりくるやうか  
あつて果しく御教書の油紙は包め供ゆく。駕篋のほとのよ迷て  
ありつが物ゆると走り進く。めをもいざ御教書と搔取やと多く逃んとま  
まは庄客們駭然叫ぶ素破癖者も逃まるとく六尺棒成遣り違  
まて渡由んとまこれども跳踰く走去る。月脱さ下と五七人追近つを  
搔抓く或は投退け打倒し辛く脱れ千日寺の邊に至る。追來る  
ものたるをけり且く息を吐く程は前面より來る旅虛僧のなを行過

んとまけるが天蓋の窓よりく某とく視く和殿の世衰とるを  
呼々られくうち驚れん男の誰と。問之せ是則來女さるははは語り且  
歡びて過去くを相譚んとまものら暇さうらん身危窮の折るま  
口云云と夜の更を辭急しく告せし小采女さる天駭れひく。そく天  
蓋を脱取く某は被らるひ相伴よく通霄路を走りく佐界は執  
是より日々小年束の物くるを仕り又と一束のん物語も備細は走りて  
然るく大なるを又悲しくも一入るは先をこれを受とりぬとのひは  
仇討免許の状を項は掛る切推外し。秋布小遞与せし秋布  
これを受戴なく今小年束の和殿の働ためすびぬを死御教書は自身小  
恙もくとり復したる功の高たのさうごま夫の中環會く。ま久保ひ進んせ  
ぬひ。この績へ神明佛陀の忠信を憐みる冥助のあつたは



悟らば遊君を恨む。いづく愚ふ。くも足らぬ。昔の一人。せふく  
和女郎。心地感ひく。多くもあらぬ。本銭を失ひ。贖彼此。受給る。絹を  
引債。かか。身價の金。二百両を。き。調へ。償身。く。程も。帰  
御の途。より。逐電。せられ。その折。と。婿。く。腹た。し。限。り。を。往。方。知。れ  
後。せん。御。あり。空。く。故。郷。へ。帰。り。く。も。多く。の。債。は。生。活。の。便。著。も。遂。ま  
る。く。ち。り。く。獨。鎌。倉。へ。赴。く。博。多。殿。は。仕。下。り。志。を。改。め。く。先。非。を。悔。ふ  
正。大。さ。る。上。毛。は。在。一。時。の。武。藝。へ。好。む。技。な。れ。ば。い。く。倍。心。く。け。大。刀。抜。く  
術。も。覚。え。り。今。ち。ら。ど。い。が。ぶ。る。よ。和。女。郎。は。則。善。智。識。悟。道。の。祖。師。が。あり  
け。り。と。ひ。と。覺。て。の。怨。も。あ。り。む。と。い。は。和。女。郎。夫。婦。の。く。の。無。是。上。恥。る。ん  
や。と。い。ふ。亦。羞。え。然。つ。を。此。も。諱。む。と。む。の。名。を。告。る。る。ゆ。死。心。の。あ  
ら。ば。不。覺。る。る。あ。ま。と。理。の。迫。り。制。ま。れ。ば。枕。に。面。を。て。流。る。涙。を

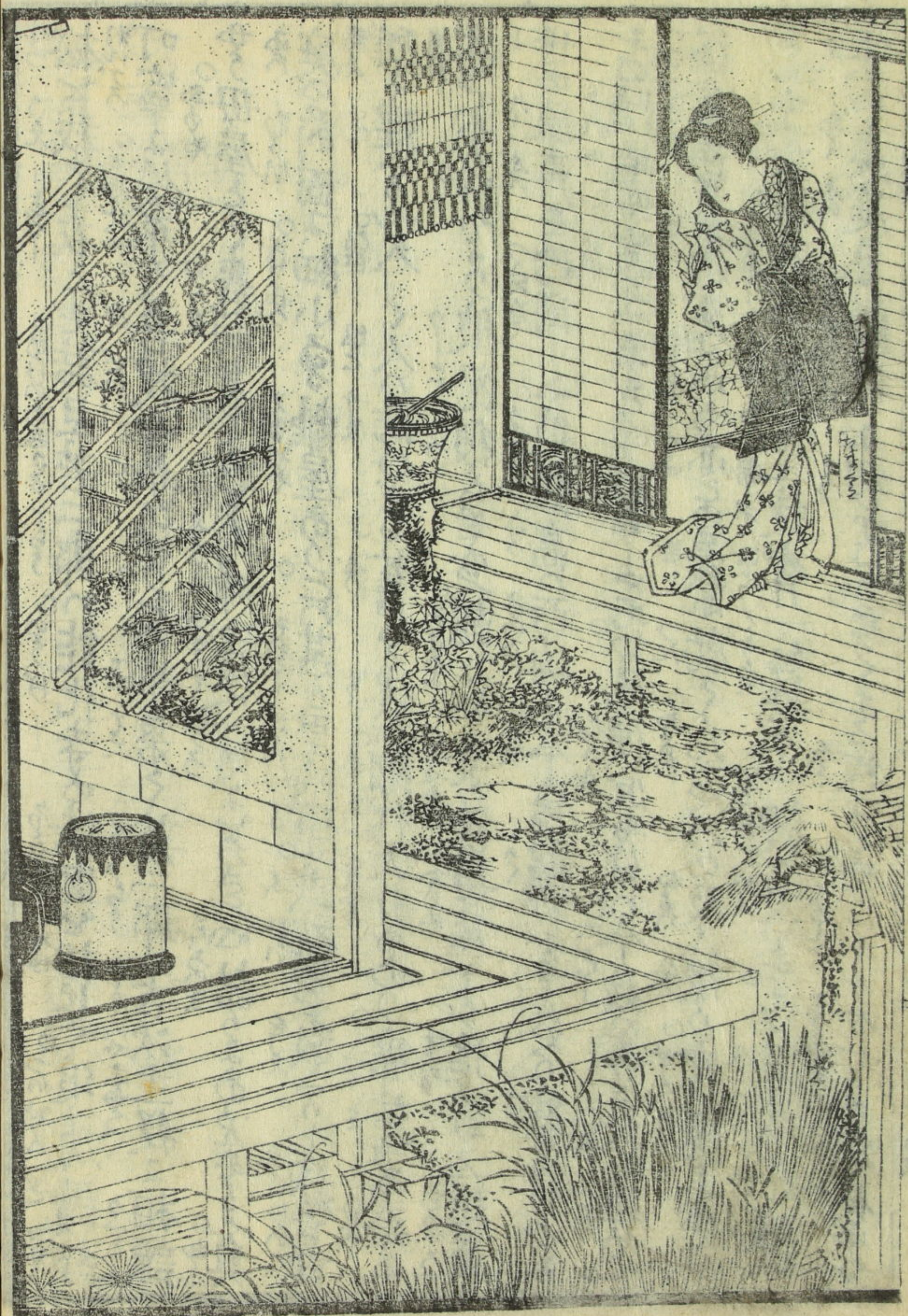
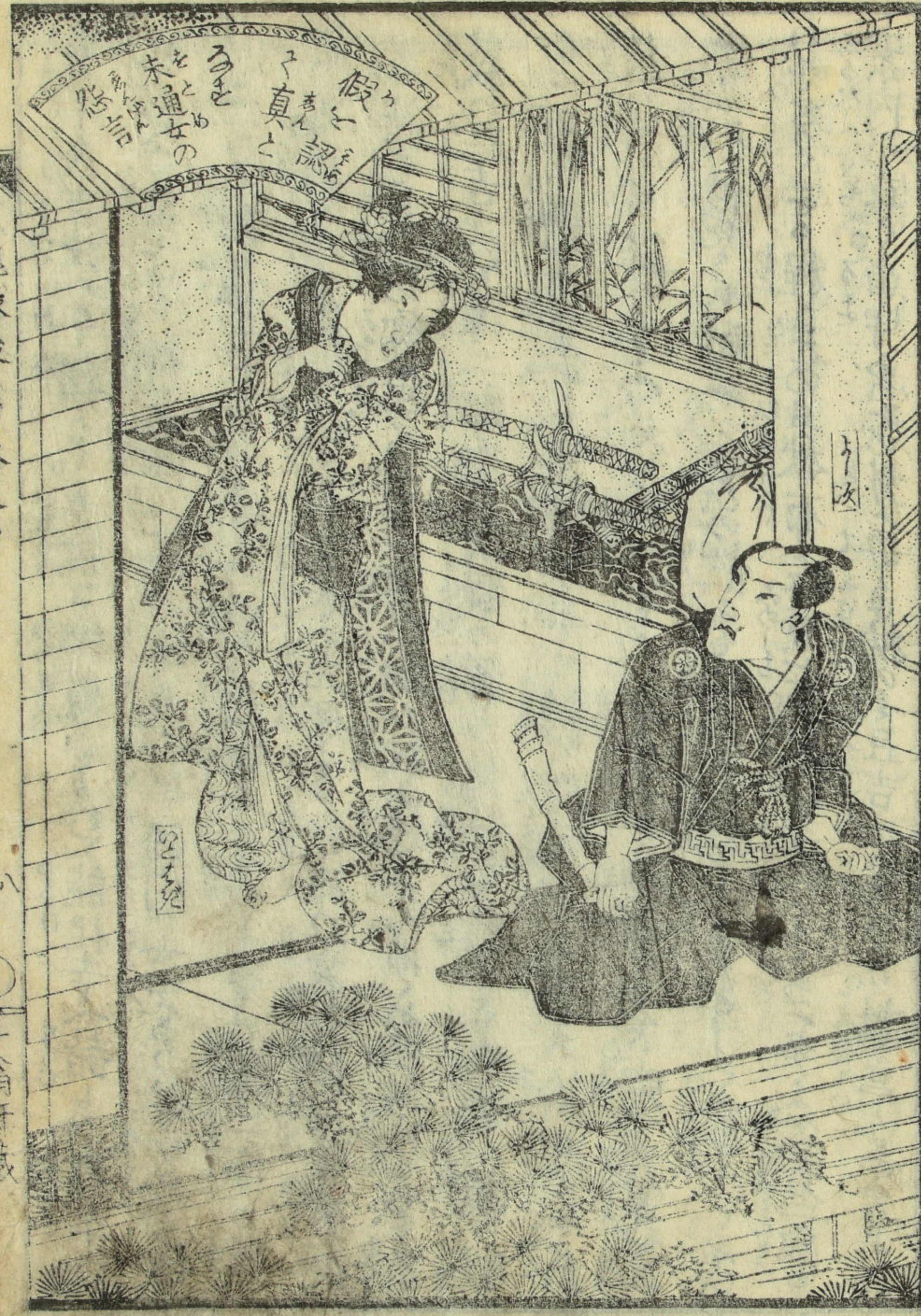
押拭ひ。あ。ら。れ。い。る。程。苦。死。の。の。こ。ら。ゆ。け。り。教。る。身。を。寵。る。ぬ  
く。死。財。を。費。し。く。も。苦。界。の。苦。を。抜。く。あ。ひ。恩。を。仇。め。く。逃。走。る。罪。科。の  
重。を。知。ら。ぬ。は。れ。も。知。ら。ぬ。止。く。死。の。只。身。勝。る。恋。の。欲。天。道。許。し。ぬ  
後。久。後。の。斯。る。該。ど。う。禁。む。死。の。あ。ひ。の。い。つ。も。亦。泣。沈。め。若。二。郎。稍。進  
出。暮。七。の。ち。對。ひ。く。適。愛。死。丈。夫。の。魂。海。る。ま。曾。の。廣。を。羞。え。何。の。も  
い。難。く。さ。れ。む。の。枕。が。二。百。兩。を。の。身。を。偷。く。ま。り。と。知。ら。ぬ。相。伴。ひ  
某。の。罪。の。免。も。ぬ。相。竊。入。の。財。を。賊。ま。る。王。法。律。家。の。允。さ。ぬ。所。幸。ゆ。て。免  
る。と。も。恥。又。これ。より。大。さ。る。覺。期。極。め。く。い。と。い。ひ。由。訖。ら。も。脇。挿。の。刀。に  
柄。ま。る。と。り。け。く。自。盡。せ。んと。ま。る。程。は。暮。七。透。さ。も。推。禁。め。く。正。る。ゆ。根  
塚。ゆ。内。室。の。さ。ま。れ。く。され。御。邊。も。惑。ひ。め。い。欲。繼。夫。婦。共。侶。の。刃。の  
命。を。絶。の。よ。と。も。その。只。情。死。と。い。ま。く。の。誰。か。潔。白。の。人。と。せん。や。二。百。金。ま

贖ひ多し作り罪の自然は滅んされらの理義を多しと説諭されて  
若二郎も枕も稍頭を擡ぐ教諭寔は味ひあり然りるる縁家産の  
田も圃も悉皆沽却して二百金調ひたりと其甚七微笑く否其が  
望みの財のふあらむとを夫婦の評を企ふ又何をこの方の  
罪を贖ふ死と問は甚七それと浦二郎殿の貴方の答の懐順め  
厄難を舎兄に代りて身まのめは系叔との憾のあら二親達も朽そく  
いと媚くておちがまらめいとや又いゆる春采女ぬの舎弟に代りて  
来ませしと欺偽を謀るのい又偽よりて敗るとありて亦御邊親  
子の怨を醸するゆる死且采女ぬの浦二郎と分釐の違ひが今何  
その人らとこのいとも疑ひの解くらんこれらの疑惑妬忌遺恨残  
よく令弱は説諭しく一毫も恨を送さる瀬川御夫婦を相資けと為す

仇人加二郎が所在と索の賊首經高が隠家もよく穿鑿金と大功を立  
させまわらせんと誓ひぬ其の謝義とて彼二百金を進らせ然ると  
二親の舊恩を雪ぎ盡せる系叔との孝女とわれんけ引め然りふと問  
もて夫婦の歎びの心氣色小顔れる中若二郎の幾どと領を連徹  
妙くられり敷るも其の亦是男一匹の感激のあまのその説は任り系  
叔は説勧め疑似の恨を解去し非如女兒の諾ひとも其かくすいふら  
この義小障りあるとと夫婦誓言をまぐれば甚七ゆるぎて懐めたり  
ける廿日の購身券書ととり中一うち披死く若二郎夫婦のほら一措  
今約束の二百金翌とも延てまわらるる受収めひひといふ夫婦の感涙の  
落もおぼえを受戴たるときも俯沈する系叔は云云と報知らまを  
ども系叔の涙の白鳥れて心をなげ吉次と秋布の甚七が理義分明小人残







口鬼録後集卷下

い

右

右



つがう入るら秋風小曾のあは波うち返し晝夜燃る火の國も心ぼくの盡  
処とよと真愛をなめる浦寂てあはまされとの謎々欲づうと刃を揺でく席  
薦の綻搔捨り涙とも小怨むれば吉次いとつらあるとと受とも情も  
如右思つらと世をなると他一女子は迷へる為ははる偽るへ死衛りも論  
せ一とあるら浦二郎あは辟月あ痕る今眼前小同胞が雙祖だくをな  
るうはの疑ひ氷室成夏の氷と鮮易うはを憾らぐ浦二郎がせを早う去  
つてこあ身のさうこれも亦腸を断歎死へ然りければもる應憑へはる日秋  
布が阿川湊ふ船歌りしとと腫張る乞者をえうその折浦人のしり  
件のを者へ去々歳の春向の磯は流寓りた身は金瘡さえありしとと里  
人の心抱あく甦生りしととこのことと秋布は備吉次はあはと  
思ひまけれど面影変りく似づもあはらうし一件のを者とのとるは且秋布

主役とつれども認め面色をればその人あはらうと思ふのうう憐を餅を  
買と取せんとそ舊来一方五六町立之のる隙は乞者のせりしとと  
有此者乞者の吉次が冤鬼のやあけん欲とと選憾しさま泣あれと  
秋布が吾侪は報らる是時ま秋布の動の濱ゆく敷られのめを吉次  
と受いり彼乞者浦二郎が亡魂の頭れ放尚死るましく現身の世も存  
命であるものるは竟は再會せやの己ん近死日向の磯へ索行り欲まれ  
緯の上虚実の定ふ不知まんその言左右を俟のいと論せ頭をち掉て  
つよ思ひせんとも二人竊は謀合や辯巧まをのひあしとと賺の  
それを誰の實言とせんをよの程は淫しもる浦二郎をと名生りとも左  
のそ惜しもあるまは強面死人の心やといひつらと泣沈め吉次思のを勃然と  
あくを餘りある怨言る縦吾侪が吉次ると浦二郎をとも涙亦

聖賢の経書の諸より天魔は魅憑らるるともさふ娘と不義せんや況浦  
 二郎さるるもの浦二郎と名生口れとあるや語り誣るるさるる且のる雪月ふ  
 衰七が約束ある疑解の一條二百金の身價を棄捐せしめん彼の親  
 公の舊借財を雪ぐよあるまや有右者あるの心と親中も孝他も信あり  
 この議を忘れぬゆゆ秋とのるも果を糸秋へ願ま眉をうち揚て心穢れ説と  
 る昔損せし財を七人の怨を解んと武士も似ゆる薄情二親遠のり  
 せまれ二百両の舊借財も最借郎を換んとさるるさるるさるるけよのり  
 母屋へ来るるまを彼秋布の淫婦といひさるるさるるさるるさるるさるる  
 推考より引の泣声まを果る愚痴を疑る妙子の嫉妬の敵ま書られ  
 言次の困下果るいひさるる折る母も枕が母屋る縁頼より声  
 高女ふ糸秋々々と呼立れ序次やいとさるる得親の勝りも泣只

隠心糸秋の糸の糸糸の恋衣衣衣甲斐る恨のるさるるいひさるる恋入  
 離亭の腰障子陰より雲時窺窺く阿唯と一声応り母屋を投る  
 出くも妬婦の後影は目送る吉次へ一息吻とつひさるる有然程る枕へ  
 女児を便室よ呼近づけてと散る縫刺の衣片よ身躰を進めて喃糸秋  
 今此の事及ぶとも浦二郎との生写る来女ぬを疑て心病とさるる腹  
 さらしひさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 親がひさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 浦二郎さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 さるる世の愚魚目る所行るさるる好も好も一盛り又後逆る縁縁さるる  
 此とつれさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 ぐらうら昔河竹の夜毎替る客でまらさるる遭りさるる人よあさるる



ふらふら枕障子を閉ぢ。ひひよりの早く死なせ。疲勞のひけめ夕饌と今も  
らせん且く休ひひひ。と。空間まを秋布ホの母屋を造る庭の離亭入りの  
けり夕東の點燭比の枕がら運前煎茶飯櫃サ菜羹離亭の蕭然るり  
し。も。うち相譚声賑く睦し。げる吉次夫婦を妬し。と。糸糸秋を。あひひ  
絶ても絶つ。裏見の葛の色間より。り。あるやと縁履を伸上れ。れ。裁  
籠の冬樹の枝は隔られ。視目定ふ。届る。ども障子。映。人の影。彼。正  
しく。つ。郎と秋布。ふ。そ。あ。ん。む。ん。是。ん。よ。う。小。寄。添。ふ。何。を。恨。ま。の。面  
當。で。噫。腹。を。う。め。い。ふ。せん。左。も。右。も。死。身。身。の。憎。し。と。思。彼。淫。婦。と。  
刺。も。違。へ。強。面。り。郎。よ。思。ひ。ま。る。ん。と。思。ひ。詰。る。無。分。別。准。備。の。短。刀  
抜。り。く。潜。近。つ。巻。石。傳。ひ。六。七。步。ゆ。程。は。能。化。寺。の。裏。の。木。く。背。後。は  
願。父。若。二。郎。糸。菘。等。と。呼。制。ま。の。吐。嗟。と。を。う。ら。ち。擧。げ。ん。く。え。ん。を。な。る

若二郎の痺る足を一足蜚ふ走懸り引戻し縁頬の撞と推居是成  
無敵の何事ぞ。いぬる日より母もいせ。送身代。論。し。も。ま。も。聽。け。ぬ。質  
太死魂性より。死。怨。を。根。持。く。今。の。刀。物。の。二。味。の。定。は。沙。汰。の。限。り。ま。り。  
親の意見は。後。の。不。便。さ。ら。る。ふ。う。け。後。の。患。を。断。ん。の。吉。次。と。あ。り。ん  
し。も。潔。く。思。ひ。え。ま。秋。布。と。の。も。睦。し。う。客。人。達。を。慰。め。ん。秋。心。を。な。さ。ぬ。が。も  
否。然。然。と。な。り。放。り。く。覚。期。を。せ。ま。と。敦。圍。く。声。も。外。へ。憚。る。親。の。慈。悲  
刀の柄。を。握。れ。も。糸。菘。怕。る。氣。色。を。親。の。仰。を。用。ひ。ぬ。不。孝。死。し。く  
泥。粉。入。階。寺。と。も。思。ひ。断。ら。れ。ぬ。の。身。の。因。果。を。憎。し。と。き。撃。ん。と。る。う。の。撃。撃  
ま。く。死。な。が。ま。ま。の。も。思。下。敷。は。も。せ。ど。況。や。親。の。身。あ。ら。る。本。望。は。は。ら。う。  
こ。く。斬。る。の。心。と。身。を。衝。著。る。項。を。伸。し。く。死。を。究。め。る。妙。の。執。念。退。退  
る。若。二。郎。の。い。ふ。及。ぶ。と。刀。の。鯉。口。既。は。四。五。寸。抜。掛。る。を。や。候。め。と。林。下。は

の日は是則も枕目と泣腫く走りまわつて情強たこの子を憎む親の心  
 くら敷のふとも一日の怒り治りて後悔しぬるの死したるの復んやよと深  
 念しぬる。若二郎隻眼を睜せしめりとも免し措て秋布はま疾  
 肩しむる。衰七は唯諾する。第一條をいせんと然るに親も子も死すの後  
 まも悪名を削らんと死あえう。要をあれと懐より。準備の早繩とりしは  
 糸秋が双のをも背へ振揚振著る。や先々と綁て北門の此方の老松の  
 幹は林足と敷糸苗めく嘆息しつ。をれ糸秋目今敷半死刃小振。この郷の  
 親の慈悲死て花の咲く時もある。松の操は恥らひく。奮れし心を改め今宵  
 一夕辛にめん。枕もあろる。憐愍を被るひて。さあると伴やく  
 うち落しる糸秋が短刀とり揚引提く。障子を破と閃れども心をあふ二  
 親の残る夜寒の肆月の空の八十八夜の別霜解ぬ。雲間の月も庭の

隈ある樹下闇心の島夜も迷りてとと燈火の光遠く映を。出居のこめを  
 退ける有右程は離亭する。吉次秋布は衰七の糸秋が車の趣茂  
 既不定く洩けり。いふまゝ死と相譚ふ。衰七声を潜くと執念深く疑る  
 女子の愚心痴の今あらふせん。絢々然と虚々たる。退單のこれ災禍を  
 俟ふ。庶幾で彼大功の細謹を顧む大礼の小讓を辭せむとる。古語あるが  
 あるト夫婦は告むととと立退せる。とと又秋布も豫て夜話も告げりた  
 けり。主従を拯る彼無名氏のととあり。死身同胞の妻たるの一箇の栄一箇の  
 枯ん三輪の後乾坤九也會んとひも今茲當れ。何れ知む。何れ知む。何れ知む。  
 色ど現衰七が諫の愛。旅行の準備ある。とと吉次領を猛杖立  
 よとと準備小暇る。然らば又糸秋の更も庭の樹下よ。を敷糸は  
 まも且親は恨めりと。迷ひ邪魔人畜二悪道の苦をこの世うらむ。死

天の山劍の林の松の鍼引は夜露の雨非々とある歎死の誰が所為をみる秋  
 布が所為をみるも釋とも釋ぬ郷の索を延ぬ短夜の時をまを死ぬるとも死なむ  
 竟も彼人々を執も殺さる已死歎とを跳揚々々狂心猿意馬の尾筒不  
 似る乱髪顔不被れと西のふれ現閑花は蜻巢子一風情あり亦  
 潜然とち泣る涙不濡らも夏草の末の雷歎本の露落るる谷川の  
 岩不摧る心地と裏く胸を方瀬る然程は吉次夫婦は衰七ホの行く行社を  
 整正と出んとする不奥庭る糸秋の郷られるるを過らゆ路をれば竹を  
 醫一面を背けて走ると母屋を遠る辛く外面を諸折戸を密と推因て  
 往方も定めぬ立山を糸秋の信とを噫朽を後妻が郎を誘ひ出ると逃ると  
 逃さんと返せ戻せと呼びひけて追まされぬ郷の索は忽地引止られて醫居は輓  
 ひら又起つて回るとる氣を胸く果の地上は轉輾びつ泣よりの外はるりけり有右又

吉次夫婦主従は根塚が宿所を潜ひぬくととほまを殺さる夏草深は  
 一徑路を過るとる程小糸の釣索は被倒されて三人齊一忽地撞と輓  
 ひられ埋伏しけん暴雄ホ十名を頭れぬ韓々と郷の豫く在備の長  
 韓櫃へ吉次秋布は衰七ホと一人別らち合れて造化精妙と細々言はる  
 軀に棹の韓櫃を擡起り足なむ往方もまをさるる案下某生再説  
 糸秋の吉次秋布ホがゆきぬる送恨の堪ぬれ稍息を吻は起し  
 噫朽惜や腹ぐや郎と宿畧一淫婦とを満すも郷の索は自由を  
 ぬれ一人念慮を虎と見く石小を矢もあつたをうや鐵の餘るるも念力  
 のく断はぬえ況これらの麻索をぬふまを血走る眼の四下を見廻し看輪  
 遠彼方の緑頬の下は舊田る草芥鏃のありとあつたをうや鐵の餘るるも念力  
 見え物あり然れども回遠くと足も届るをうや鐵の餘るるも念力



